

女たち 20 話せない

性暴力被害者の話を聞きたいと、私は調査関係者を訪ね歩いた。被害者が相談することさえ難しいことを、切々と説かれた。寄り添いたいと苦心する支援者たちの姿から、現実がみえてきた。



①性暴力の相談先などを記した手のひらサイズのカード
②被災地で配られた「震災後の女性・子ども応援プロジェクト」提撰

性暴力被害者の話を聞きたいと、私は調査関係者を訪ね歩いた。被害者が相談することさえ難しいことを、切々と説かれた。寄り添いたいと苦心する支援者たちの姿から、現実がみえてきた。

周りに気づかれたくない。「死にたい」などの訴えに被害が潜む。

東日本大震災の1カ月後。民間団体でつくる「震災後の女性・子ども応援プロジェクト」は、性暴力への対応や相談先を記したカード4万枚を、避難所などで配り始めた。

フクロウの絵に子ども向けのメッセージ。メンバーでNPO法人しあわせなみだ理事長の中野宏美(39)は「性暴力を正面から訴える」と抵抗を感じる人がいる。子どもが手にすれば女性たちにも広まると考えた」と話す。

性暴力の被害者支援では、支援者は慎重に、注意深く行動する。

「女性相談」とはつたわず、ハンドマッサージをしながら話を聞く。DV被害者支援に取り組む吉祥眞佐緒(41)は、そして福島県の避難所などを回った。凝ったツボをほぐし、「食欲ありますか」「便秘気味ですね。トイレに行くの大変ですか」などと尋ねる。

2011年夏ごろ。吉祥は、「眠れない」と話していた女性から打ち明けられた。複数女性の女性が性暴力を受けているという。「次は私かも」とおびえていた。

その後、別の女性が襲われそうになり、「やめて」と大声をあげた。男は同じ避難所に居続けた。その女性は被害届を出さなかった。吉祥に、「周りに気づかれたくない」と言った。

「避難所で暮らせなくなると困る」という思いが働くのかもしれない」と吉祥。

別の支援者は、弁護士も支援団体のスタッフと同じTシャツを着て、女性たちの相談に応じたと明かす。被災者がスタッフと雑談しているとしか見えないように。

震災後始まった相談電話「よりそいホットライン」。コーディネーターの沢上幸子(41)も、初めから性被害を相談する人は少ないと話す。「死にたい」などの訴えに被害が潜む。

沢上に、「眠れない」「さみしい」と力なく話す女性がいた。半年ほど電話を繰り返して、避難所で性行為を強要されたとようやく話し始めた。怖くて抵抗できなかった自分を責めていたという。

(甲中陽子)